

第十二回のご座（2017.08.20）／独善的講釈的備忘録

～ グローバルセカイの“ノコギリヤネ” ～



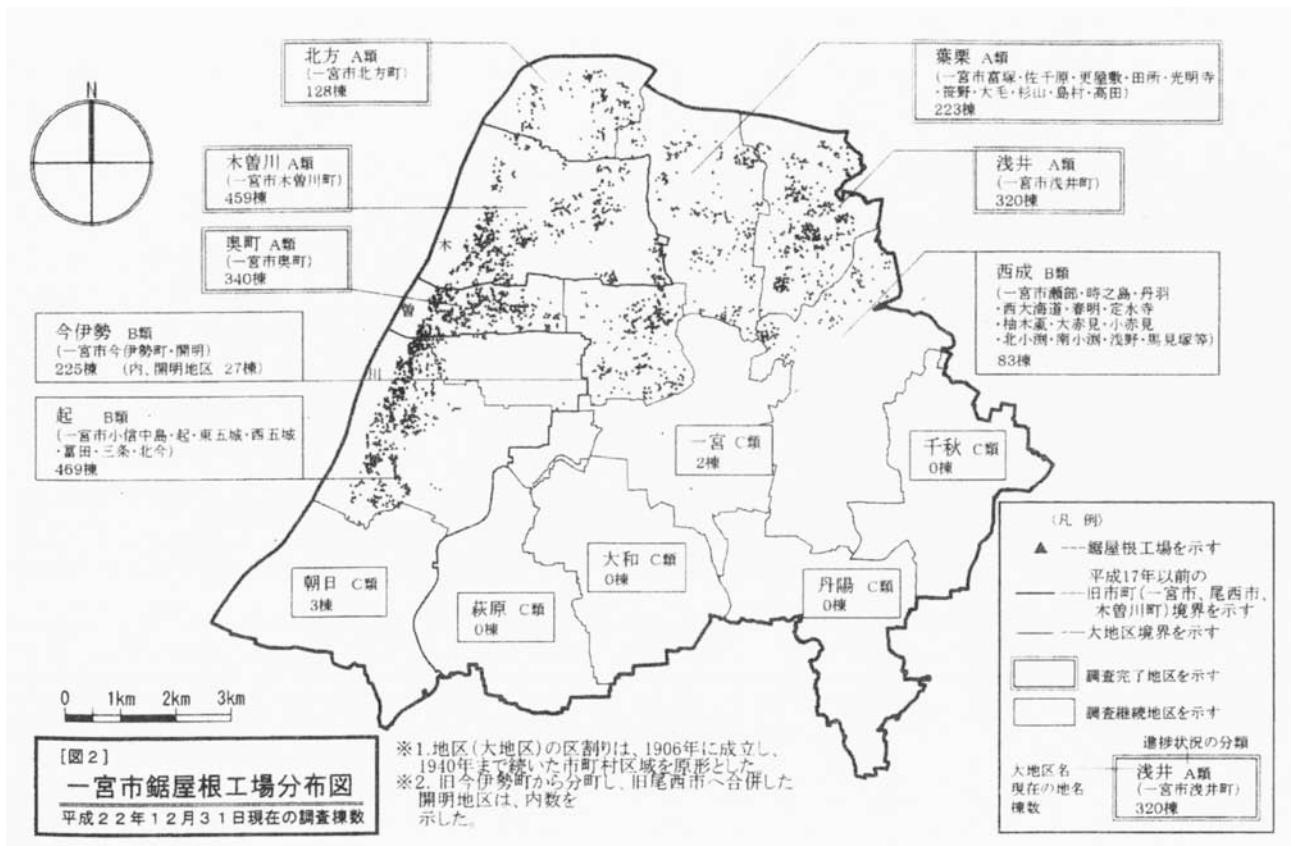
（第十二回「のご座」報告書より）

毎回、新鮮な驚きや新たな出会いを体験する「のご座」。今回の『ヨーロッパのこぎり小旅行』も、刺激的な内容でした。年齢とともに衰える記憶力の薄れぬ内にと着手した備忘録でしたが、脇道に逸れることしきり、辿り着くまでの大きなタイムロスに加えて、随分と独善的かつ講釈的なものになってしまいました。

今枝忠彦

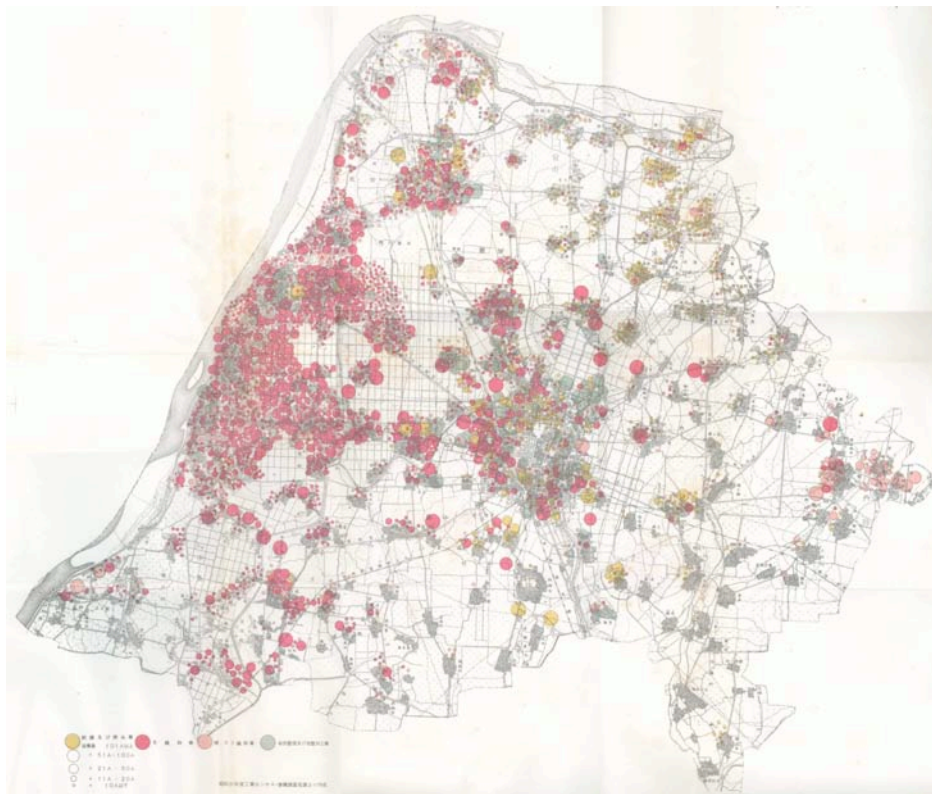
（一宮市今伊勢出身、神奈川県藤沢市在住）

図1：のこぎり屋根工場の現状



「一宮市のこぎり屋根工場分布図」(尾張のこぎり調査団による調査、2008,11.30~2010.12.31)

図2：高度成長期における一宮市の繊維工業 (昭和30年)



「一宮市調査報告書」(一宮市・中部都市学会編、1958年10月)

「のこ座」の始まる二時間前、わたしは「起」のまちを歩いていた。生まれ育った一宮を離れて四半世紀、ふとしたことで故郷に興味を抱き、この10年余、暇を見つけて帰省し、「尾州」周辺を彷徨している。その魅力のひとつが“ノコギリヤネ”に他ならない。それは、鋸型屋根の個々の建築物だけではなく、その回りの環境を含め、さらには群れとしての広がりを含むものである。

新栄町のバス停の西、起郵便局が角地に立つ交差点から北に向かう。かつて、この道路に沿って商店街が形成され、バス通りの起銀座とともに昭和40年代あたりまで活況を呈していたことを当時の写真が伝えている。しかし、現在では、しもた屋あるいは建替えられた住宅が建ち並ぶ中、わずかに残る店舗や取り残された看板等からは、その様子を窺い知ることは難しい。300m程進むと、濃尾大橋に続く東西方向の幹線道路にぶつかるが、その二つ前のT字路交差点の北角地には、昭和46年まで映画館があったという。大正時代末に起劇場と呼ばれる芝居小屋が立ち、戦後、映画館として改装され、あづま劇場と呼ばれてきたものである。バス通りにあった二つの映画館とともに、このあたりは賑やかな界隈を形成していたことであろう。しかし、現在、その場には住宅が立ち、周辺を含めてその面影はまったく見ることができない。

“ノコギリヤネ”に関して、興味深い2枚の図がある。ひとつは、「尾張のこぎり調査団」の作成した「一宮市のこぎり屋根工場分布図」(図1)である。操業停止したものを含めて、その数は2,500とも言われる。これは、その現存する「のこぎり屋根工場」をプロットしたものである。そして、もうひとつは、いまから60年程前の昭和30年当時の「一宮市・尾西市・木曾川町における繊維工場分布図」(図2)である。工場の大きさが従業者数の規模別に分けられている。赤色が毛織物業で、判別しづらいが、他に紡績・撚糸業、綿・スフ業、染色・修正加工の工場がプロットされている。これらの繊維工業関連の工場数は、そのピークは昭和47年に約8,300であり、この図の昭和30年時点では約6,000である。量的な違いはあるが、分布のすう勢は同じであろう。この図は、のこぎり屋根工場の分布ではないが、当時の“ノコギリヤネ”の実態をとらえたものといえよう。

「起」のまちは、大きく変貌した。それは、この地域で展開した毛織物業の盛衰と重なっている。しかし、その毛織物業は、幾度もの障害を乗り越えて、その集積、技術が生き残っている。グローバル世界で闘えるレベルにあると聞く。その毛織物業を目に見えるかたちで象徴しているのが現役、退役を含めたのこぎり屋根工場である。その群れは、“ノコギリヤネ”としてひとつのエネルギー体を構成し、この地域の「ものづくり」を推進してきたように思える。「ものづくり」と「まちづくり」の関係は表裏一体、不即不離である。ものづくりとまちづくりの融合していたこの「起」のまちを、わたしは「起・産業コミュニティ」と呼んでいる。そして、このまちの盛衰、“ノコギリヤネ”の今後の行方に、大きな関心と期待を持っている。

さて、「のこ座」に向かうことにしよう。『ヨーロッパのこぎり小旅行』と題する今日のテーマも興味深い。鋸屋根工場発祥の地と言われるイギリスと平松さんの奥さんポーラさんの故郷ポーランドの“ノコギリヤネ”。そのまちの姿、また、グローバルな視点から見えてくる日本の“ノコギリヤネ”の姿はいかなるものか。期待が高まる。



さあ、「のこ座」第十二幕の開演である。メインの報告の前に何か企みがあるらしい。ちょうど今日まで、一宮スポーツ文化センターで、「ノコギリノコドウ」と称して、のこぎり屋根工場の写真展示をされている林秀樹さんが登場された。100棟を越えるのこぎり屋根工場とそこで働く人たちの大きな写真展示されているとのこと。彼がカメラに捕えたのこぎり屋根工場が“2連”であること、そして、「働き手が70〜80代で、後継者がいない」ということの一宮の“ノコギリヤネ”の現状がよく表れている。先ののこぎり屋根調査によれば、全体の9割強が1〜3連で、中でも2連は半分を越えている。多くが、家族単位で営まれてきたものと思われる。そしていま、後継者がいない。前回の「のこ座」でも同様の指摘があったように記憶している。一宮の“ノコギリヤネ”は、家族というテーマを抜きにして語ることはできないようだ。後日、配信されてきた報告書を読み、「ハッ」とさせられた。始めにこの情報がインプットされたおかげで、外国の“ノコギリヤネ”との対比が非常にわかりやすいものとなっていたのだ。

イギリスの事例報告から始まった。イングランド北西部の大都市マンチェスター郊外、空港の南に位置する **Quarry Bank Mill** に始まり、リーズに向かう途中のハッダースフィールド郊外の **The North Light Gallery**、リーズ郊外の **Thwaite Mills Watermill**、**Sunny Bank Mills**、リーズの西に位置するブラッドフォード北部の **Saltaire**、ハリファックの西方にある **Hardcastle Crags**…。現在はいずれも、工場としての機能を失い、産業遺産として、今はミュージアム、ギャラリー、オフィス、アトリエ、ショップ、レストランなどに再利用されている。ここで少し、これらの工場が建設された状況を整理しておこう。イギリスでは、17世紀の後半に産業革命がおこり、資本家たちによって、峡谷沿いに水力を動力として利用した近代的工場の建設が進んだ。水車小屋を意味するミル (Mill) が工場の意味で使われるようになった所以である。そして工場だけでなく、労働者住宅、子弟のための学校、礼拝堂、運河、道路、市場など、生活関連の施設を合わせて整備し、近代工業の町を建設していった。**Quarry Bank Mill** は、1784年に工場の建設が始まり、労働者住宅、学校、礼拝堂等が整備されたようである。ソルテア (**Saltaire**) は、ブラッドフォードで5つの毛織物工場を経営していたタイタス・ソルトが、1853年にそれらの工場を郊外に移転・集約して建設されたものであり、規模が大きい (面積 20ha、住宅約 800 戸) だけでなく、医療、教育、娯楽等の都市的機能を備えたコミュニティの建設を試みたものといえる。ソルテアは、ソルト (**Salt**) とエア川 (**Aire**) を組み合わせたものである。

ポーランドでは、旧電力会社の鋸屋根工場が大学として利用された事例、移動途中で見かけた鋸屋根の形状が壁面と連携したものなどの他、かつて東欧のマンチェスターと呼ばれワルシャワ、クラクフに次ぐポーランド第3の都市として発展したウッジの工場再開発が紹介された。ウッジは18世紀末までは小さな田舎町に過ぎなかったが、1837年に最初の近代的な工場の建設に始まり、その後、資本家たちによって、イギリスと同じような工業開発が進んだ。事例で紹介された「マニファクトゥーラ (**MANUFAKTURA**)」は、そのような工場再利用のひとつである。

イギリス、ポーランドの工業開発とも、近代的工場だけでなく労働者住宅や学校、その他の生活環境整備を含み、ひとつの町を建設あるいは既存の農村社会を近代的工業地域

に改造するものであった。イギリスに 100 年遅れて始まった日本の工業化もイギリス等に範を取った近代工場の建設が進められたが、欧米のようにひとつの町をあらたにつくることはなく、既存の農村社会との関わりを持ちながら、工業が進出し、工業地域社会を形成していったように思われる。特に、尾張西部のこの地域では、農家の副業として「出機（でばた）」が定着したように、まさに農村社会の中で工業化が展開されていった。日本の多くの都市は、近代化＝工業化のもと、近代的な都市づくりが進められてきたが、既存の農村社会との関わりが強く、その「後進性」が常に指摘されてきた。“ノコギリヤネ”はまさに、日本のまちの「後進性」を象徴するものでもある。しかし、これは、地域社会を維持する「共同性」という側面も持っている。（追記：イギリス、ポーランドの工業地開発について）



「向こうでは、のこぎり屋根をどう呼んでいるのか。」参加者からの質問である。基本的には、「シェッド (shed)」と呼ばれるらしい（他にも、“saw-toothroof”、“northlight shed”などの言い方があるようだ）。日本語では「小屋」、「納屋」ということのようなのだ。そのため、「ミル (Mill)」よりも建物の価値が小さく見られており、先に取り壊されるということらしい。まあ、「ミル (水車小屋)」というだけに、リーズ郊外の Thwaite Mills の写真にあるように動力源を意味すると考えれば、その理屈はわかる。彼らから見れば、庭先に建てられた 1 連、2 連ののこぎり屋根工場など、まさに「納屋」であろう。木造の安普請とくれば尚更である。合理的に考えれば、減価償却を終えた一宮の“ノコギリヤネ”は、いつ無くなってもおかしくない運命なのかもしれない。逆に、物置として使われているならば、それは的を得た選択と言えなくもないような気がしてしまう。

見方を変えて、「仮設空間」と考えることはできないだろうか。いわゆる歴史的建築物のように保存という対応が難しいならば、永続的なものと考えのではなく、次の展開に向けての仮の状態だと考えてみる。移行、変化などを意味する「うつろい」という言葉がある。論理をかつちりと積上げていく文明には理解しがたいかもしれないが、あいまいとか多神教的文明のわれわれには何だか感覚的にわかるようなものかもしれない。その「うつ」には、「空」、「虚」、「洞」という漢字があてられる。そして、これを展開すれば、「ウツは内側が空洞なのに、そこに何かは生まれたり宿ったりするという生成力をもつ」、「空っぽのところから何かが出てくるのが“うつろい”である」（松岡正剛『日本という方法』）ということになるようだ。まあ、いささか、眉に唾つけての感じは否めないが。

ただ、“ノコギリヤネ”に限らず、「空っぽ」の工場は、東西を問わず、アーティストにとっては格好の表現空間、創造空間であるようだ。イギリス、ポーランドの事例からも、ギャラリー、展示空間としての利用に事欠かない。また、元々が織物の生産空間だけに、「ものづくり」というイメージにも合うだろう。ウッジの美術大学の学生に案内されたという「今一番熱い工場」ではないけれど、「今一番熱い“ノコギリヤネ”」から「ちょっと冷めた“ノコギリヤネ”」、「冷めきってしまった“ノコギリヤネ”」とか、「うつろう」さまの面白さがあるかもしれない。少し冗談が過ぎたかもしれない。しかし、全ての“ノコギリヤネ”がこのまま残ることはあり得ない。そうだとすれば、まったく新しいものへの変貌も含めて、“ノコギリヤネ”の「消えてゆく＝うつろう」さまも非常に興味深いものであ

る。それも含めて、「ウツ（空）、空っぽ」としての“ノコギリヤネ”には、無限大の可能性を感じる。



報告の中で、悪戯っぽく（報告書では少し控えめに）映し出された一枚の写真が印象に残っている。それは、ノースライトギャラリーに展示されていたと思われる当時の従業員の集合写真に、平松毛織で働いていた人たちの集合写真を重ねたものであった。これは、“ノコギリヤネ”という「イエ」のもとに構成された「家族（的共同体）」の集合写真といえるかもしれない。さらにこれは、「ノースライト」の“ノコギリヤネ”だからこそ成立したのではないだろうか。産業革命の主役を担った「ミル」ではなく、天井窓からの自然光を頼りにする農業社会の後進性に通じる“ノコギリヤネ”だからかもしれない。「同じ釜の飯」ならず、「同じ“ノコギリヤネ”の下」である。この写真は、彼が生まれる前の時代のものであろうが（彼が生まれていても構わないが）、この写真に彼は、ある時代にはあった「良きもの」を見たのかもしれない。そしてそれは、大人になってからの彼らの世代では経験、共有できなかつたものかもしれない。

ここで、直接、間接問わず知り得た情報をもとに、平松毛織三世代の関係性を考えてみた。少し（かなりかもしれないが）、わたしの憶測が絡むことをご容赦いただきたい。世代的には、彼のお祖父さんはまさに「ガチャ万」の真ただ中、おそらくお父さんはわたしと同世代だろうから、子どもの頃の記憶として残っているはず。しかし、平松さんの世代には、過去の繁栄は昔話でしかない。図式的に整理すれば、廃墟の戦後から高度経済成長をまっしぐらに進んできた祖父の世代、その延長線で夢や理想を語れた父の世代、しかし、それが全くの虚構であることが判り、まち、企業、学校、家族などが崩壊していくさまを肌身で体験することになる 70 年代以降生まれの世代となるだろうか。そして、彼らは個人として社会、世界に対峙していかなくてはいけない。祖父、親の世代とは全く事情が違っている。平松毛織、そして遥かイギリスの地の集合写真に見たものは何だったのか。

平松毛織の“ノコギリヤネ”は今、「のこぎり二」として残ったが、そこには、早くから繊維産業からの撤退を決断するというお祖父さんの「先見の明」があったという。そのお祖父さんが亡くなる前、二ヶ月にわたり、平松さんはお祖父さんと毎晩のように病床で、“ノコギリヤネ”について話をしたという。お祖父さんにとっては、「工場」、「倉庫」でしかなかったものが、想像もしなかつた“ノコギリヤネ”に変貌するさまに驚きとともに、喜びを感じたのではないだろうか。

だからという訳ではないが、“ノコギリヤネ”を祖父母世代から孫世代に継承していく道筋を考えられないだろうか。冒頭で触れた「ノコギリノコドウ」の林さんが言われていたように、働き手の多くが 70 代、80 代になっていて、後継者がいない。子の世代では継承できない事情があるし、年齢的にもその先の新しい展開は難しいだろう。そういえば、第三回「のこ座」では、いくつかの鋸屋根工場を手がけた大工棟梁の浅野昭一さんから直接、平松さんが“ノコギリヤネ”の技術を継承するさまをわたしたちは見ているではないか。“ノコギリヤネ”は、「ガチャ万」とは違う価値観を持った世代が受け継ぐことで、いろいろな可能性が期待できるのではないだろうか。

そして、その場合、血のつながりにこだわる必要はないだろう。江戸時代の武家や商家の養子縁組のように、そもそも日本の「イエ」は、血縁よりも経済的な共同性に重きが置かれたといわれる。先の集合写真のように、“ノコギリヤネ”の下で働く人たちを「家族」と考えてみる。実際、昔ながらのションヘル機で高品質の製品を生み出している話題の K 毛織さんでは、新しく入った若い世代の人が、祖父世代の人から働きながら技術を継承していることを何かで読んだ記憶がある。機の技術とともに、“ノコギリヤネ”は継承される。さらには、繊維・毛織にこだわる必要もないのではないか。大切なのは、“ノコギリヤネ”の下での「家族」を考えることである。母屋が近すぎて工場の再利用が難しいと聞くが、これはまさに、“ノコギリヤネ”の下での居住者と利用者の「家族」の関係性をどう考えるか、つくるかということである。“ノコギリヤネ”は、「家族」の問題を浮き彫りにするとともに、あらためて「再家族化」の可能性を秘めている。



イギリス、ポーランドの「のこぎり屋根」からは、かなり遠くに来てしまった気もするが、わたしなりに、“ノコギリヤネ”が見えてきたように思う。農村社会の「共同性・コミュニティ」に通じる“ノコギリヤネ”、「ウツ（空）」であるがゆえに創造空間となる“ノコギリヤネ”、そして「再家族化」の可能性を秘める“ノコギリヤネ”。しかし、これは、個々の“ノコギリヤネ”を具体的にはどう再利用すればいいのかに答えるものではない。当事者たちが考えていくときのベースにあればよいものである。それによって、“ノコギリヤネ”は個々の特性を活かした利用がされつつも、「まち」としてのまとまりをつくっていくのではないだろうか。既に、この「のこぎり二」を始め、初回に紹介された「つくる。」「家具工房 TRUNK」など個性的な“ノコギリヤネ”が現れている。そして、第十一回「のこ座」の会場となり、今後の利用が検討されている旧田内織布蔵も“ノコギリヤネ”に含めていだろう。さらに、第四回の「のこ座（磨き）」を切っ掛けに、わたしの古くからの友人である藤森幹人さんが、また別の“ノコギリヤネ”の立ち上げを企画しているようだ。

これから多くの“ノコギリヤネ”が出てくることだろう。わたしは、個々の“ノコギリヤネ”が、魅力のある場として輝きを見せながら、まとまりのある「まち」をつくるさまを想い描くとき、ひとつの図を連想する。「南方（みなかた）マンダラ」（図3）である。南方マンダラとは、柳田国男に並ぶ日本の民俗学の創始者であり、多方面に渡る博学的知識を持ち、特に自然科学において粘菌の研究で知られる南方熊楠（1867—1941）が考案したものである。もともとは仏教で宇宙の信実を表現する「マンダラ（曼陀羅）」を独自に科学方法論のモデルに読み替えたものである。ここで注目したいのは、「萃点（すいてん）」という南方オリジナルのアイデアである。萃はあつめるという字であり、人々の出会いの場、交差点みたいなものを意味する。そこで異なるものが交流し、ぶつかることで影響を与え合う。図では多くの線が交錯し、黒くなっているところである。いうまでもなく、「まち」はマンダラであり、萃点となるのは“ノコギリヤネ”のイメージである。

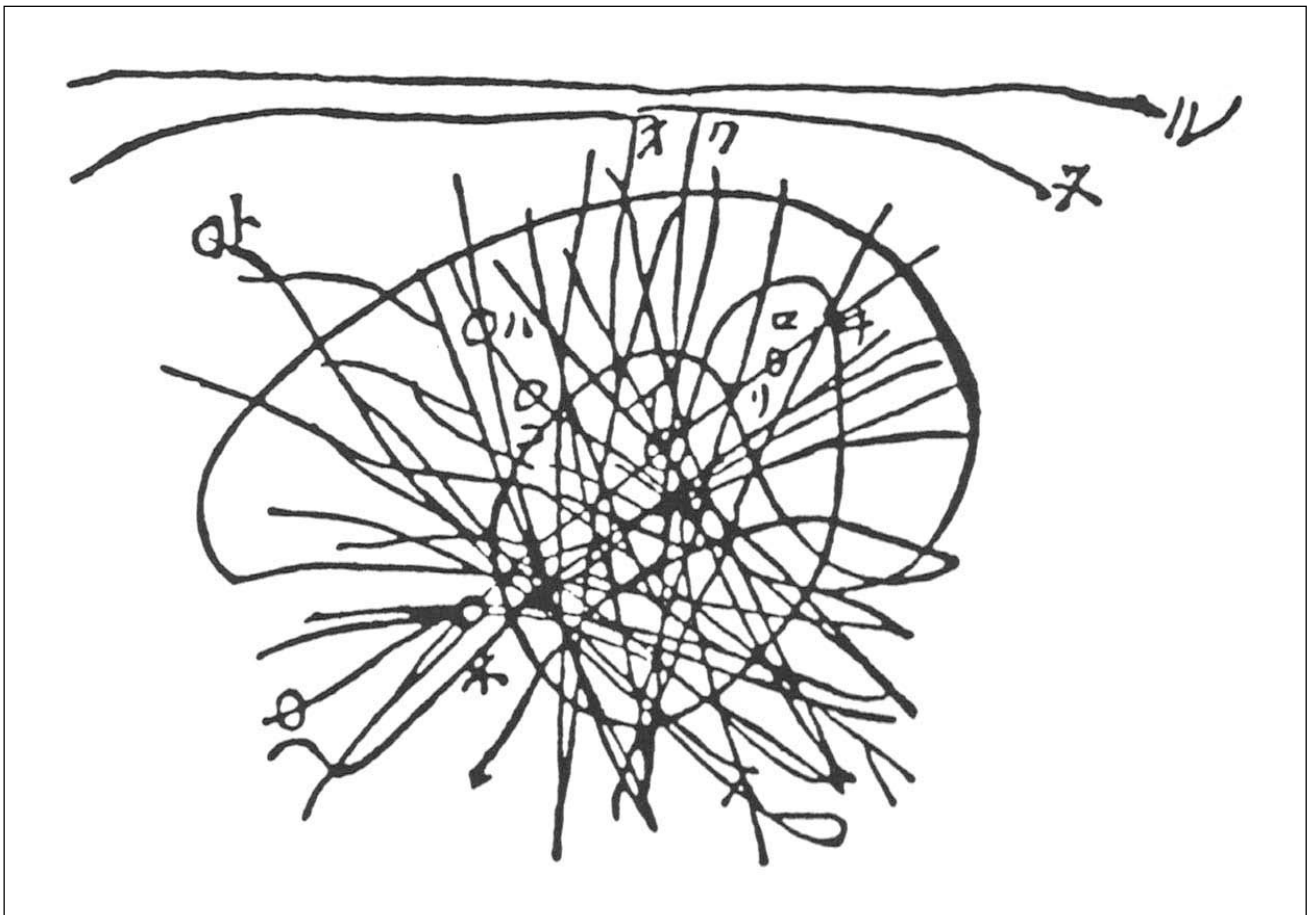
最初のところで、「ものづくり」と「まちづくり」は表裏一体だと記した。それを結びつけているのが「ものがたり」だと思う。ここで、「ものづくり」は狭義にとらえず、広く“ノコギリヤネ”の利用と考えてみる。そうすると、それぞれの“ノコギリヤネ”の「ものが

たり」を紡ぐことが、「まちづくり」になる。その「ものがたり」は、いわゆる「セカイ系アニメ」のように、世界の破滅を救うといった、いたずらに個人が世界に直結する必要もなく、「まち」や「家族」というスケールを根柢に描かれるものだと思う。

今回の報告を聞いていて思ったのだが、ポーランドの訪問を切っ掛けに、平松さんの頭の中には、現地の学生たちを組み込んだ“ノコギリヤネ”の「ものがたり」が始まりつつあるのではないだろうか。それは奥さんであるポーラさんの故郷に訪れたという偶然の結果だったかもしれない。しかし、実は、南方マンダラには「偶然」も組み込まれている。20世紀初頭、南方は、必然性の因果律をパラダイムとしていた西欧科学に対して、偶然の作用する縁起律を持ち込んだのである。そう、平松さんとポーラさんの「縁」に始まり、「家族」の「ものがたり」は動き出していたのかもしれない。

「のこぎり二」の“ノコギリヤネ”は、「まち」から「セカイ」につながる「ノースライトシェッド」というところだろうか。ますます、「のこ座」から目が離せない。

図3：南方マンダラ



●イギリスの工業地開発について

水力紡績機等の発明者であるアークライトが、1771年、イングランド中央部に位置するペニン山脈南部の寒村クロムフォードに動力として水力を利用した近代的な綿紡績工場を建設したことから、Mill（水車小屋）が工場の意味として使われるようになったという。アークライトは、その後、第二、第三の工場を建設している。第二工場の建設に合わせて、世界最初の社宅といわれる労働者住宅、礼拝堂等を建設し、生産設備や工場建屋だけでなく、水路、運河、倉庫、ホテル、道路、市場、学校など、生活環境の整備なども進めた。かつての牧羊を基礎とした農村は、近代工業の町へと変貌した。

このような近代的な工場で成り立つ地域は、Factory Community（ファクトリー・コミュニティ／工場の地域社会ないしは共同体）と呼ばれ、資本主義経済の進展とともに普及していくが、一方で労働者とその家族の居住環境、衛生、教育状態などが劣悪化していった。イギリスのテレビ局チャンネル4が制作したテレビドラマ『The Mill』では、1830年代のQuarry Bank Millを舞台に工場労働者の悲惨な状況が描かれているという（現在の博物館の中で工場のシーンが撮影されているらしい）。

そういう中、社会改革家、空想社会主義者と呼ばれるようになるロバート・オーウェンは、後に自分の義父となる事業家のデイルとアークライトがスコットランド南部のグラスゴー近郊の村に建設したニュー・ラナークの紡績工場を手に入れ、そこで労働環境と経済性の両立する理想の共同体建設を試行した。これが「モデル・ヴィレッジ(model village)」として、その後の工業地建設に影響を及ぼすようになる。そのひとつが、事例のソルテア(Saltaire)である。

ちなみに鋸屋根について、アークライトがクロムフォードで1783年に建設した第三工場(Masson Mill)には、第一、第二工場にはまだなかった鋸屋根があることが、吉田敬子さんの資料に記述されている。われわれの見慣れた平屋建ての鋸屋根とは趣きが異なっている。グーグルビューで確認することができる。このあたりが、最初の鋸屋根であろうか。

●ウッジ（ポーランド）の工業地開発について

ウッジは、19世紀にロシア統治下のポーランド王国領となり、工業地域としての開発方針がたてられ、ドイツやロシアの資本が導入し、織物・紡績工業の集積が進行した。王国直轄領で開発が容易であったこと、勾配のある小河川があり、動力としての水力確保ができたこと、木材資源、安価な労働力が豊富であったことなどが関係しているという。

1837年の最初の近代的な工場建設は、ドイツ人のルートヴィヒ・ガイヤーによるものといわれる。その後、多くの資本家、事業家によって工場が建設されたが、最初はドイツ人にリードされ、その後ポーランド人、ユダヤ人が参入した。その中で注目される人物として、ユダヤ人のポズナンスキ父子があげられる。雑貨商から綿織物業に進出した父カールマンの遺志を継いだ子のイズラエルは、1872年の自動織機工場の建設に始まり、その後の25年間に、紡績から染色にいたる綿製品の一大工場コンプレックスを建設した。また、労働者の住宅、病院なども整備し、イギリスのモデル・ヴィレッジのようなコミュニティ

づくりを展開している。事例で紹介された「マニユファクトゥーラ (MANUFAKTURA)」は、1997年まで工場として稼動した。

また、ウッジには映画大学があり、アンジェイ・ワイダ、ロマン・ポランスキーといった著名な映画監督を輩出している。そのワイダが1975年に製作した『約束の土地』は、19世紀末のウッジを舞台に、ドイツ人、ポーランド人、ユダヤ人の三人の若者が、繊維工業の熾烈な競争社会で生きる姿を描いている。ユーチューブで視聴することができる。

(2017.9.9)